

特110

846

集詩一第葉杏塚石

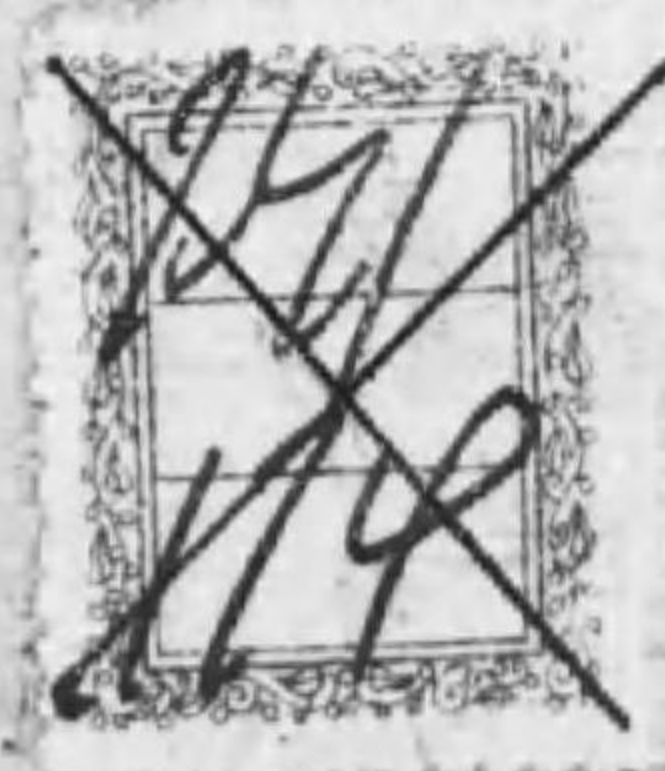
る散に風夕

著葉杏塚石



1922

社流青



始



特110

846.

詩集

夕風

に
散る

■石塚杏葉第一詩集

石塚杏葉著

東京

青流社

出版

大正

11. 10. 20

内交

序に代ふ

絶頂に喜び狂ふ者も

どん底に悩み苦しむものも

世のすべての人々の

落ちつく所はみんな一つなのだ

そして幸福な人間も

不幸な人間も

歩いて行く道は

はるか向ふに見える

「死」の扉まで行くことなのだ

幸ひなる者も

不幸なる者も

道程だけ行けば

みんな

「死」の家に到達するのだ

人々はたゞ

「死」への道を

只管いそいでゐるのだ

富める者も

貧しき者も。

.....

俺を信じてくれる人は

ないかも知れない

俺を信じてくれる人は

一人位あるかも知れない

いやまつたくないかも知れない

俺を信じてくれる人は

なくとも

自分自身が

信じて居れば

よた／＼乍らも

道は歩めるのだ。

詩集 夕風に散る目次

「死」……まで歩いて行く……………二
歩いて行く……………二
墓場の朝……………七
亡き父……………一〇
尺八を吹く者……………一三
永久の悩み……………一八
朝霧……………二二
夕の悩み……………二五
幸福を求む……………二七
心の儘にろの一……………三〇

同ろの二.....三二
 同ろの三.....三三
 幸福の報ひ.....三六
 詩は慰め.....四〇
 星と自分.....四二

夕風に散る

熱烈な戀の囁き.....四六
 戀と愛を捨てる.....四八
 追憶.....五一
 夕風に散る.....五三
 月光よ.....五四
 戀人の去つた時.....五六
 小庭の夕.....五九

草花.....六一
 純な娘に.....六三
 草取り女の戀.....六五
 意氣地なし.....六六
 伸びて行つたら.....六八
 女子さ.....七〇

流れ行く沈黙

地上の炎.....七四
 夏の朝の森.....七六
 淋しさ影.....七八
 田園の夕べ.....八一
 晝寢.....八三
 カラカコ笑つた.....八五



死まで歩いて行く

詩集夕風に散る目次 をはり

争ひ	八七
夕べの畑	九〇
散步	九三
沈黙の夜	九五
私の好きな鳥	九八
町の夕焼	一〇一

歩いて行く

同じ歩調で俺は歩いて行く
ある目的地に向つて
然し俺の心ははてしない
見きはめのつかない道を
曲り曲つて歩いて行く
空洞な道を
何處まで行つたら目的とする所
心の落ちつく處があるのか？

朝には東へ夕には西に曲り
俺の心のまゝに
さながら空中を飛んでゐる
とんびのやうに歩いて行く
足は歩む程疲びれる……。

或は目的地にゆかず途中で
倒れるかも知れない
俺の歩みは毎日によつてゐる
うれでゐて

果しない道をたどつてゆく
ほんとに不思議だ
今俺の心の歩みを續けてる道は

眞赤な空で青い草の生えた
ほんとに美しい山を、草をふみ分けながら
戀の淺瀬を越えて
辛苦くるしみの山をよち登り
はるか向ふの幸福な山を眺めて
ぼんやり立つてゐるのが俺なのだ

果して幸福の山を越える事が出来やうか。

果しのちいと同じ道を年中くろ苦しむ
目の前に幸福があつても
到底俺にはちこえゆけずに終るだろう
廣々と
廣い海の中の小葉だ
流れ流れて漂ふ救ひ手のない俺だ
遂には力盡きて倒れるだろう
ゆく先は

おちつく先は……「死」……
あふ……

俺は重い足を引きづつて

心のまよひに

歩いて行くのだ、果しのない道を――。

墓場の朝

安らかに在す亡き父に捧ぐ

影のやうに淋しく朝霧に動いてる墓

青く點々とこけが生じて私を見つめてる

「死」して残るこの墓標は――

私は悲しいやうな喜びが湧いてくる

青い小草が

孤獨の墓場を慰さめてくれる

今朝私はすつかり掃除して

草花を飾りほつと吐息して

見た――

墓の息づきのやうなもうろうと立ち上る線香の煙

私は黙もだして見つめてゐると

深い――墓土の下に引き入れらるゝやうに

自失した――止度なく暗涙は流る

私は永久にこのまゝ消ゆるのかしら

おゝ懐かしき墓よ

濃い竹藪から

清新な光を投げた朝の太陽が

洗ひざらされた墓場に輝いた時

私は彼に肩をたたかかれた時のやうに

ふつと面を上げた

輝やきに満ちた私の眼が

眠れる墓場の一角を眺めて

淋しく微笑した。

――亡き父の墓掃除にて――

亡き父

極樂に眠れる亡き父に貧しいながらこの小さな詩集を捧ぐ

青い夜の星の輝き

亡き父の面影がまぼろしの如く

青い世界を歩いて行くが如く

「おゝ懐かしき父よ」——と

聲をかけやうとする時

青き夜は赤々と變つてきた。

あゝ懐かしき父は

どこしへに青い世界に

取り残されたのだ

あゝ私の努力が足りなかつたのだ……

是からの力が必要だ

思ひかへせば五年の前。

有りし父の親しみ情愛、

今はたゞ天の父にひざまづき

貧しき言を交すだに能はぬ
今は全く赤い世界となつた
口惜しき青い世界よ……
亡父の安らかに眠れるを
せめてものなぐさめとする。

尺八を吹く者

我が淋しい町を日中盲目の尺八吹きが通つた

火の車の回轉してゐる道
金光をなげて
銀光となつて光る
物恐ろしい夏の午後
人一人歩かない道
陽^ひにやけた黒い顔に
ほこりに汚れたねづみ色の頭に

ごろの付いた形ばかりの麥藁帽子をのせた
老年者の尺八吹きよ。

汗とほこりでぶちだらけの足を
引きづり引きづり

遠くさすらひの旅を

續けて來たのだらう

老年者の尺八吹き

死の影のやうな濃い影

哀愁、悲壯、寂寥

此の社會の魔が
おまへを襲ふてついで行く。

かなづる音曲は

世を呪ふやうな

世を恨らむやうな

自己を悲しむやうな

りの音を聞いてはおのづと引締り

涙ぐましくなる

門ごとに物乞ふて生きて行く

ろの心情ころ哀れ
盲目なる尺八吹きよ。

家々を訪れて行く
黒い魔の如く死の影の如く
静かに歩みを續けて行く
彼は物恨らめしげに
眞夏眞晝の
太陽を仰ぎては過ぎて行く
照りつける金光は

小石に輝やき銀色とあり
彼の後を襲ふて行く——

永久の悩み

如何なる慰さめがあるうとも
とこしるに消えぬこの悩み
戀しい君はあの菩提樹の下に
静かに眠つてゐる。

おとりの魂ころ

私の慰めである

おとりの樹のさゆれころ

私のおぐさめである。

生前私に約したことが

朝靄のやうに

私の前を流れて行く

とこしへに消えぬこの悲しみ。

菩提樹のかげから

さわ／＼吹いてくる墓場の風

寂しい私の胸に

君の囁きの如くひびく。

けれどごんなに慰さめられても

とこしへに消えぬ

とこしへに消えぬこの惱み

おととこしへに消えぬ――

朝

露

廣々とした畑

豆の葉のあからんでゐる

堤の下の廣々とした畑

かすかな乳色の朝靄。

大きな不思議を包んで

處女の秘めし思ひを包んで

白々と這ふて延びて行く

魔のやうな朝靄。

あの廣々とした畑にも

あの嚴かゝ森にも

魔の手は伸びて行く

おゝ救ひの神よ。

救ひの手よ。

太陽よ、

この朝靄は陽の光りに

銀色となつて亡びて行く。

眼覺めた處女は誇を胸に抱き

かすかな魔言を残して

どうもろこしの葉がくれに

逃れつづけて行く。

救ひの陽は揚々としてのぼる

偽りなき純な處女は

幸福によるこびつゝ

しつとりぬれた畑に立つ。

命弱き朝靄のかたみか
銀色の玉が

ふんにも知らぬやうに
畑一面に光つてゐる。

夕の悩み

遠い暮の鐘が今日も鳴る

あゝ夕が来たのか……

俺の黙想は夕暗の中へ續く。

だんだん濃くなる闇の色に

今日も空しく過ぎ去つた

あゝたええられぬ平凡さだ

俺は大きな石へ頭を打ちつけて

血の出るのを見て喜こぶだろう……
粉みじんに骨の碎けるのを見たら
さつぱりして俺はほく笑むだろう。

あゝ夕よ……

平凡さに苦しむ俺を

この俺を静かにいたわつてくれ……。

幸福を求む

俺は一日として幸福の日を

送つた事がない

こうもりは闇から闇へ飛んで

あれで幸福か知ら……。

あゝ闇に生くる者よ

俺は一日ありと明るい幸福の日を送つて見たい

いつになつたら幸福にめぐり會へるだろう

あゝ淋しき者よ。

花壇の中に一きわ目立つ白百合は
ほんとに幸福だろう

俺はりの前を通る度に
心から羨ましく思ふのだ

誰か俺の耳もとに力強く囁いた
人間はいつもく幸福を求めてゐて得られぬものだ
君は現在の恵まれた境遇を以て

幸福と感謝してよい筈だ

俺はそれを黙つて聞いてゐた
ろして宇宙に向つて言を放つた
俺はこの境遇に感謝しつつも
より以上の幸福を求むる。

心の儘に

ろの一

どこまで行つたら私の目的とする所へ行かれやう
毎日同じことをくり返して

懊惱、憂愁、辛苦

代る／＼私を襲ふ

そして歩みを引き止めやうとする

私はあらゆる迫害を退ぞけて行かう

飽くまで私の信ずる道をたどつて行かう

自然に私の歩みの止る所は

「死」の家である

「死」は扉を開けて

私の行くのを待つてゐる。

ろの二

心の落付かない俺の体は

引きづられるやうに歩んでゆく

下には「死」の濁流だくが恐ろしい渦を巻いてゐる

一本橋を

悪魔はたゞ「食ふて生きる」と叫びつゝ

平然と俺を引きづつて行く

倒れかゝろうがつまづこうが

悪魔は振り向きもしないで

引きづつて行く。

俺ははなれやうとするが

悪魔は俺の弱點をつかんでゐて放さうとしない

下では濁流が氣味悪く笑つてゐる

橋は危ふくゆれる

眼がぐらぐらする

——あゝ疲れた。

ろの三

1

どんなに俺をあざけろうが

どんなに俺をのゝしろうが

黙して知らぬ顔して

俺の身体と智力の續く限りは

出来ることは何でも仕様

りれで生きられなければ

天命なのだ——。

2

どんなに正直にやつても

どんなに盡力しても

一度信用を失したら駄目だ

人間は「初歩の忠實」より外何ものもない

然し青春の頃はりの信條が

發見出来ない。

3

今俺の心は青春の浮きくした心のまゝに

動いてゐるから

老輩から見たら

馬鹿げたことに見えるだろう

然し俺も中年頃になつたら

考慮の心に動かされて

眞面目にあるだろう。

幸福の報ひ

幸福を求むる君に忠告しやう

幸福の結果は恐ろしい

ろして無残な結晶として生れるよ。

飼ひ鳩を見たまへ

人間より愛され食物は充分だし

まづ幸福だろう。

一度かごより放たれたら

翼は不自由、野生の食物は不味い
遂に野に於て死すだろう。

彼の白百合は暖かい愛を受けて

獨り誇つて咲いてゐるが

一度暴風雨に逢ふたらどうだろう。

風に吹き飛ばされ

雨にふみにじられて無残な姿となり

人の愛は遠ざかるだろう。

幸福を求むる君よ

幸福を求むるをけつして非としない
人生の暴風雨に對する防禦が出来てれば。

一度幸福を得暖かい空氣に包まれたら

そして幸福な日を送つてゐた人が
冷たい空氣の荒い社會の風に吹かれたら。

温室から極寒の野に植付られた

草木のやうに

満足に生きてゐられやうか。

君けつして幸福を求むるを

自然のまゝに生きよ

それが幸福ではないか

詩は慰め

貧しくとも悲しくとも
どんなに嘲けらるゝとも
どんなに罵らるゝとも
どんなに呪はるゝとも
俺はずん／＼歩いてゆく
淋しくとも苦しくとも
たとへ見かへる人はなくとも
たとへ慰める人はなくとも

たとへ救ひの人はなくとも
憶せず俺は歩いて行く
俺の胸には一つぱいに
散亂たる星の輝やきのやうに
「詩」がうづまつてゐて
俺をなぐさめてくれる。

星と自分

星の輝き

わだかまりの多い俺の心の如く

俺の黒き影は

魔の如く

清い芽生はいつだろう

罪深^かき俺のからだ

真くらの空に

さんせんたる星の輝き

戀の芽生はまだ遠し
月の出ぬこの星夜

夕
風
に
散
る

熱烈な戀の囁き

春の風は我々に幸福を與へるやうに
ばらの花びらのやうな貴女の唇に
甘い接吻して生きて行くのだ
如何なる迫害があつても
私達は永遠にはなれまい
月が消えても星の輝きが赤く老ひても。

一切の幸福は失せても

いつまでも變らずに私のハートを
あなたの熱い血潮で包んでくれるなら
私は喜んであなたのやはらかいハートをしかと抱きませう
ろして永久に……
太陽は黒く朽ちても……。

戀と愛を捨てる

可愛いばらよおまへは萎れてしもふ
私の心は磨ける劍に
おびやかされてゐるやうに
絶えず私の胸を苦しめてゐるものは
戀と愛だ。

嵐のためにばらが地上にこぼれたやうに
私は戀も愛も皆んな捨てやう

私は淋しい孤獨にならう
ろして慾も捨て奥深き山に行かう
いと静かな仙境に入つて眠らう。

戀や愛があればこゝろあらゆる苦しみを受け
罪惡をおかし不道徳をして
あくせく戀を得やうとする
そうしてまで愛を得て樂しむ
あゝ嫌だ、嫌だ戀も愛も捨てやう。

可愛いばらよおまへは萎れてしもふ
おまへは亦春が来て
ほこりがに咲けるが
私には永久に
戀と愛とはかへらぬのだ

追

憶

艶かな白百合を見ると
俺はいつも初戀の君を見るやうな
遠い思ひ出を呼び起す。
あの小ざれいな錢湯で
君の濃艶な姿を見た其の夜から
深い谷底に埋りて窒息したやうな
俺は深い物思ひにふけり
始終憂鬱に閉ざれて

君の姿が幻の如く現れる
丁度赤坊が母親の乳房を求むるやうに
君の姿を見たかつた
今追憶してみると
涙ぐましい感じがする
過ぎ去つた夢は思ふまい。

夕風に散る

名も知らぬ美しい花が
夕風にほろほろと散つてゆく
いつも楽しかつた私の胸は
君去つたあとの淋しさに
ほろほろと泣いてゐる。

月光よ

月光よ、戀人よ

俺をばげましてくれ

俺はお前がゐなくては

遠い暗い道を歩むことが出来ぬ。

俺を憐れと思ふたら

ろの手でしかと抱いてくれ

俺はお前の手にすがる

俺はお前のハートの響きを聞く。

お前のろの赤い唇よりもれ出づる言葉と

月光のはげましとを頭をたれて聞く

ろして月の光りをたよりにしたなら

静かに歩むことが出来やう。

戀人の去つた時

颱風がおれを襲ふとき

いつもおれに警告してくれる

もつと勵め!

そんなに弱つてはいけあいと。

俺は此の颱風がどんなに嬉しからう

俺をかほごまで思ふてくれる

颱風は俺の戀人なのだ

いつも俺は感謝する。

月が出て星が輝やく時

いままでの勇氣はゆるみ

押さへつけられてゐた遊意心が

頭をもたげる。

おゝ颱風の去つたとき

おれの勇氣はうせる

おゝ戀人の去つた時

おれは怠け者になる。

小庭の夕

八ツ平の葉が處女を誘惑するやうに
廣がつてゐる小庭に
赤い空氣がしづかに訪れてくる。
ゆつたりと巨人の歩むやうに。
夏の太陽は暮れてゆく
水氣をふくんだ風が陽炎を追ふて
訪れてくる
日まわり草は去り行く戀人を追ふ如く

落ちゆく太陽を

うらめしげに見つめてゐる

冷たい闇が八ツ手のかげから

よろけ出して

小さい庭を包んで行く。

草花

草花——

何と可愛い名だろう

私は愛せずにはゐられない

どんな草花でも

戀人のやうに接吻を惜まぬ

私はおまへを見おまへを抱く時

悩みは薄らいで行く

おと可愛い草花よ

永遠に美と香を失はないでくれ。

純
な
娘
に

都の華かな風が吹いてくる
淋^{さび}しい田舎娘のほくに吹いてくる
あの麗はしい流行の衣は
あの白粉のあまめかしい香は
麥の穂かげに唄うたふ田舎娘の
美しいあこがれとなる
おと純真な娘よ
ろのあこがれはあまりにいまはしい

恐ろしいことなのだ
あの草原に咲く毒草の持つ華さなのだ
美しい純な娘よ
おまへは青くのびた大根畑に自由に生きてくれ。

草取り女の戀

田舎娘は日にやけた
可愛い顔して草をとる
うれしい思ひ胸に秘め
夕べ待ちく草をとる
戀しい男も豆畑で
同じ思ひで草をとる
月の出待ちく草をとる。

意氣地なし

君が住む小窓に

圓い月がさし込んでゐる

私はろの下を歩きつ戻りつ

呼ばうか知ら

.....

呼ばうか知ら。

私は窓の下を歩きつ戻りつ

.....

あゝ小窓の硝子戸はしめられた

今宵もまた

何んにもなしに歸る意氣地なしの私よ。

伸びて行つたら

去年の秋畑の隅にこぼした

草花の種が

蟲氣もなくすんなりと芽生へた。

このまゝ伸びて行つたら

どんな花が咲くだろう

白かしら、赤かしら、

りれども空色の花かしら

りれども小さい蕾のまゝで

枯れやしないかしら。

うれしいやうな楽しいやうな

僅かに恐れるやうな

不思議な心で待つてゐる。

女な子こさ

山の山の女子おなごさは
草刈るかごに思ひ入れ
炭焼き男の子に逢ふ度たひに
すひな眼付で笑つて通る
炭焼き男の子は赤い顔。

山の山の女子おなごさは
赤く夕陽のしづむ頃

草かご脊にゆりあげつ
山路とぼく下りて来て
炭焼き男の子をチヨトにらむ。

山の山の女子おなごさは

かごから白百合ぬきとつて

「おらあはあ

これおめつさあにあげるだあ
いゝにえー(香りの意)だつぺえ」

山の山の女子おなごさは
草刈るかごに思ひ入れ
炭焼き男の子に會ふたびに
すひな眼付で笑つて通る
炭焼き男の子は赤い顔。

流れゆく沈黙

地上の炎

燃える太陽の地上に反射して

一大火炎を演出した

この夏の陽は

我々の苦惱を増すのみだ

ひうかに逃れて

緑林にかくれやうか

私は此の世から脱退したい気がする

まばゆき光に空が煙り

私達の歩みをさへぎる

地上の炎上

いつろ火炎に包まれて

焼死して

その灰を激流に

投じたら

ひそかに微笑むだらう。

夏の朝の森

蟬がなく

セルロイドの衣を着て

涼味滴る青葉のかけで

小鳥もなく

薄衣の涼しい姿で

木々を飛び交ひ乍らさえづる。

さながらたえなる音楽のやう

これこそ自然の音律である
惱める者よ

この偉大なる

大自然のふどころに来て

夏の朝の森の音楽を聞け。

淋しき影

夕暮に川岸に立ち
流れに見入る
我が淋しき影は
死の影の如く
水にゆれ
水にゆれつゝ
底に沈みゆく

圍まわりよりおろひくる
夕暗に
深み行く沈黙
黙しつゝ
川面を見つむ
おろ淋しき影は
沈み行く沈み行く。
黒い小鳥が
氷にかすかにふれて

すぼやく目路を
かすめさりぬ
おと今我が影は
全く
流れに消えたり。

田園の夕べ

青い空気の漂ふてゐる田圃道
さわやかな一種變つた國のやうに
豊かなさわ／＼した稻の穂の響き
甘い戀人同志の囁きのやうに

惱みに苦しみに一ぱい私ハートの
ひし／＼と訪れてくる
あゝ私達の遊園地よ

私のこの胸を慰さめてくれ。

油繪のやうに夕陽は

薄青い山脈にバツト散つて行く

黙して歩みをつづけて行く私の姿は

死の影のやうに稻草の上に漂ふてゐる。

晝

寢

疲れた身を仰向きにねるべつて

ふしだらけの天井をみつめ

獨り吐息し大きなあくびをした時

無上の安らかさを感じる

ほんとの安息だ。

悩みも苦しみも疲れも

何處かへ失せてしもふ

何にも考へず大きな聲で

出たらめの唄を唄ふとき
私の胸は透明になる水晶のやうに
そしてひし／＼と
幸福な豊かな空気が押し寄せてくる
るの時私の眼は閉ぢられ
幸福な夢路を歩む……。

カラカラ笑つた

こんな大勢人がゐるけれども
私の知つてゐる人は見つからない
私の戀人と思ふ人も見つからない
みんな違つた顔をした者ばかり
男も女もみんな履物をはいてゐる
けれど私は素足で歩いて行く
人々は皆私をじろ／＼みる
この賑やかな町を通る人が

私のみすばらしい姿を振り返つて見てゆく
私は思ふ

來る人も行く人もみんな

どんなことを考へてるだろう

私は急に笑ひたくなつた

思ふさま大きな聲で

カラカラ笑つた

人々は驚いて私を見返り乍ら行く！。

争

ひ

まろらかな心根でゆく時は
貪しいことも悲しいことも

それから過去の罪惡も

みんな消えて

少しの間でも晴々しく

平らかな氣分となる

若い我々は氣早だ

感情のおもむくまゝに

互に争ふ

青々とした大空に

白い雲がういてくるやうに

むら／＼起つて

冷静に熟考すべきところも

若い意氣で

とんだ失敗をする

若いものはよく考慮せず

小さなことから争ひをして

十年の親しみをうすくする

ろして大きな損害をうける

私はいつも

沈黙を大切とし先棒とする

争ひ程私達の人格を

そこねるものはない

若い我々は慎しむべき事だ

圓い心で行けば

常に楽しく生きられるのだ。

タ
ベ
の
畑

眠りから覺めたやうに
ある寂しさを感ずるやうな
野中の一本榛
周圍は廣々とした畑
ヒステリー性の女のやうな
どうもろこし
赤らんだ葉は落ちて淋しげに
熟れた豆が抱き合ふて嬉しげに

囁き合ふてゐる畑だ
老ひた太陽の光りが
西の雲間から
かすかに畑一面に輝やく
黒ずんだ土の上にも恵みを與へてゐる
騒がしく鳴き乍ら群雀は
痛れた身を野中の一本榛の枝々に
安住の地を得たやうに
友をかへりみては囁き合ふてゐる
汝等のつとめは終つて

懐かしき家にかへり
いこふてゐる心持は
おゝ群雀よ

おまへ達はほんとに幸福だ
あしたの日を待ちつゝ

今日の疲れを語りつゝ寝につく群雀よ
懐かしき太陽よ

今日の恵みの如くあしたも亦
我々を守護し慰めてくれ。

散

歩

青々と燃え立つ新緑深き森

今青春の血もゆる俺は

あの青々とした森に入り深い黙想をつづける
たまらない静寂さ

緑の香深き森の中

寂しいけしいれど樂心が溢れる

威大なる自然に抱かれて

俺は幸福なりと叫ぶ

ろして雑草を踏み乍ら
青々とした空気を吸ひ乍ら
心のまゝに
散歩を續けて行く
この緑の香満ちた
静寂な森の中を――。

沈黙の夜

黒い雲が闇と共に
世界を包んで
静かに更けて行く
悲しき者なやめる者。
打ち甦ると静かな森に
木の間谷間に風はなく
聖者の住める森に

われは自然にねむれるが如く。

濃き雲は淡き夜を

我等の苦惱の胸をも一緒に

一重二重と包んで深谷に埋る

或は散り或は一つになり。

夜の沈黙の威厭に

草木も眠る闇野原

長き黙想續く我は

自然のまゝに漂ふ。

あゝきみは憮然と黙して

夜よ、永久に沈黙なれ

孤獨の闇雲間に満ちて

哀愁と沈黙に包まる。

私の好きな鳥

一人ぼつちのこの私
淋しいことよ今日このごろは
誰に語るも友はなし
柳の小枝にさへづる鳥は
私のほんとの友達よ。

小鳥は私を哀れんで
いつも私の好きなうた唄ふ

ろの聲涼しく美しく
花の御園にゐるやうに。

胡蝶のやうにおどるとき
夢の國に住んでるやう
私の好きな鳥の舞
淋しい悲しい暮の鐘
遠い小川を渡つてひびくやう。

夕べの魔鳥がとんできて

私のすきな小鳥をば
襲ふときこり悲しけれ
ときこり悲しけれ

私はもとの一人ぼつち
誰と語るも友はなし
悪くい闇を只見つめ
止んだ唄と舞ひが今更に
まぼろしの如く現れぬ

町の夕焼

蒼白い彼の女の顔は
夕焼いろに染りゆき
紅い色に包まるゝ
歩む姿もあでやかに
大きい柄の浴衣にも
うす紅いろにぼけてゆく
若い彼の女の血潮も
赤く燃えて満ちてゐる。

詩集
夕風に散る

をばり

大正十一年九月十五日印刷
大正十一年九月二十日發行

夕風に散る

定價六拾錢

發行所

青流社出版部

東京郊外澁谷町下澁谷八二八
(振替口座東京五八八五五番)

著者 石塚杏葉

發行人兼 新井態雄

印刷所 東京郊外澁谷町下澁谷八六
信濃毎日新聞株式會社

長野市旭町二七

□ 文藝 雜誌	青流	本誌の普及今や全國に 壹萬五千。誌友を募る	一ヶ月貳拾錢 一ヶ年貳圓
□ 青流	パンフレット	若き詩人の歌へる	定價參拾錢 送料貳錢
□ 詩歌 小品	わすれなぐさ	女性中心の年六回發行 の美しき雜誌	定價六拾錢 送料拾壹錢
□ 詩品 小品	小川の流れ	飯塚喜美子氏著	定價參拾錢 送料四錢
□ 詩集	赤い帆	藤村 豊氏著	定價參拾錢 送料四錢
□ 詩集	夕風に散る	石塚杏葉氏著	定價六拾錢 送料六錢
□ 畫	こ曲譜	今泉 碎巖氏作曲 南 咲 郎 氏作曲	定價拾錢 送料貳錢
□ 二十 字詰	原稿用紙	美しき詩人のなやみを 友に送るにふさはしき	百枚貳拾五錢 送料四錢
□ 四百 字詰	原稿用紙	とても書きよいとの評 あり(二〇字詰二〇行)	百枚四拾錢 送料六錢
□ 青流 社出版部		創作集、詩歌集自費出 版の御相談に應じます	東京市澁谷町 下澁谷八二八

151
174

終